説教20210620　ヨブ記38：1-11，16-18　マルコ4：35-41

「なぜ怖がるのか」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちの内にもお臨み下さい。

「まんじゅうこわい」という古典落語の演目がありまして、皆さんご存じでしょうか。江戸の住人が４，５人集まって、それぞれ怖いものを言い合っていきます。俺は「クモ」「ヘビ」「アリ」「おけら」　「ムカデ」などと言い合う中で、ひとり正一は「おれはまんじゅうが怖い」とつぶやきます。「何！まんじゅう！」とそれを聞いた周りの者は、にわかには信じられないようで。しかし、正一は次のように自分がまんじゅうが怖い様子を説明していきます。「俺はねぇ、情けねぇ人間なんだ。みんなが好きな饅頭がこわくて、見ただけで心の臓が震えだすんだよ。そのままいるときっと死んでしまうと思うんだ。だから、饅頭屋の前を通るときなんど足がすくんでしまって歩けなくなるから、どんなに遠回りでもそこを避けて歩いているんだよ。江戸は近頃馬鹿に饅頭屋が増えたので、俺は困っているんだ。ああ、こうやって饅頭のことを思い出したら、もうだめだ、立っていられねぇ。」

こののち、周りの者たちは、正一を怖がらせてやろうと思って、まんじゅう攻めにして、まんじゅうを正一の枕元に積み上げたり、投げつけたりしますが、正一はそのまんじゅうを一個一個、「あー怖い怖い」などと言いながら口に運び、実は大好物だったまんじゅうが腹いっぱい食えて味をしめた、というように話は展開します。最後の落ちは、だまされたことに気づいた周りの者が「お前さんの本当に怖いものとは何なんだ」と正一に問いただし、正一が「そろそろ濃いお茶が一番怖い」と答える、というのでおしまいです。

　この落語をあじわいますと、私たちが怖がるものというのは、本当に何でもありなんだなあと思わされます。この落語では確かに正一はまんじゅうが怖いふりをしていただけなのですが、そのふりが迫真の演技でもって、周りの者たちが見事にだまされた、という成り行きに注目したいと思います。

まず、まんじゅうというのは中身がなんであるか、外からは分からないという不可解なものです。それは一歩間違えば、得体のしれないものとなるでしょう。実際、江戸時代には毒まんじゅうを食べて命を落とした殿様が何人か知られていましたので、江戸の住人たちが、そんな危ないイメージをまんじゅうに対して抱いたとしても無理はないのです。そうして、正一は、そんなみんなの抱くイメージも利用して、「心の臓が震えだすんだよ」などと身振りも交えながら、まんじゅうが怖いことを、その口で物語っていったのです。

　このように、恐れというのは、私たちがある不可解なことに注目し、不可解なことを物語っていくことによって、そこにあった恐れの種が開花し、大きな姿となって私たちの前に立ちはだかって来るのだと思います。

このように恐れというのは、実に私たちが取り交わす言葉によって、大きくなっていくのであります。

さて、今日のマルコによる福音書の箇所は、もう何度もこの箇所での説教を聞いた方も多いかと思いますが、何度聞いても、又聞きたくなる、というのがこの箇所でありましょう。それは、ある意味、古典落語の定番が何度も聞きたくなるのと似ています。私たちは、何度も何度もこの箇所の同じ御言葉を聞きたくなる、というのは、怖いもの見たさでもあるでしょう。私たちは、主イエスの「なぜ怖がるのか。まだ信じないのか。」という御言葉を再び聞いて、弟子たちとともに「いったい、このイエス様というお方はどなたなのだろう。風や湖さえも従うではないか」と互いに言い合いたいと願います。

私たちは、この世のことも、そして死んだ後のことも、全てを支配されている主イエスの恐るべき力に、本当に恐れ入って、全てを委ねたいと思っていますが、その思いは、何回も何回もこの聖書箇所を聞いて、だんだんと深まっていくものでありましょう。

今日もその主イエスの御言葉の語りのひと時であります。

主イエスは、その日の夕方、弟子たちに「向こう岸にわたろう」と言われます。このように主イエスの一言で船はガリラヤ湖上に漕ぎだされます。他にも一緒の船があったと記されています。ここでの船、ということから、今のこの教会という場所を連想するのは自然なことでありましょう。ここでの船船は、この世の諸教会を意味しているのです。船出したふねぶねの一そう一そうに主イエスは船長として乗り込んでおられます。いうまでもなく船長とはその船の命運の全責任を負うリーダーの役目で在り、又全ての乗組員の上官であります。そういう意味で、主イエスは船長としては一個の人間として船の中で存在したということです。神様として船長ではなかったということです。しかし、船長としての人間イエスの姿は、決して模範的ではありませんでした。それどころか、大嵐に遭遇しても、他の乗組員の動揺する姿を尻目に、枕してグースカ眠りこけていたというのですから、船長失格と言われても仕方がないのです。今私たちは神様としての主イエスではなく人間イエスに注目していきたいと思います。弟子たちは主イエスを起こして「先生、わたしたちがおぼれてもかまわないのですか」と言います。弟子たちもここでは、主イエスのことを神様などとは思わないで、何とも無責任な一個の人間のように思ったことでしょう。「先生あなたが船出しようと言ったから、私たちは従ったのに、口ほどにもない人ですね」とでも言いたかったのかも知れません。

でも、そういった直後に主イエスが風や湖に対して発した「黙れ。静まれ」という御言葉によって、たちまち風はやみ、凪になったのでした。そして主イエスは弟子たちに対して「なぜ怖がるのか。まだ信じないのか。」と言われるのです。

「先生、わたしたちがおぼれてもかまわないのですか」と弟子たちが言い、「なぜ怖がるのか。まだ信じないのか。」と主イエスが答える。この受け答えの間に、主イエスの神の御業が行われたのでしたが、ここでの主イエスの目的は、とにかく「なぜ怖がるのか。まだ信じないのか。」という御言葉を弟子たちの心に植え付けることだったのではないでしょうか。言葉を代えていえば「信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」という事です。実際、弟子たちの間には主イエスに対する非常な恐れが生じて、彼らは「いったい、この方はどなたなのだろう。風や湖さえも従うではないか」と言い合ったのであります。

主イエスを恐れる、という事が、まだ教会に来て間もない方には、ピント来ないかも知れません。主イエスよりも、私たちの命を一瞬にして飲み込んでしまう大波のほうがよほど怖いよと、言われるのも分かります。しかし、私たちはここで冒頭の饅頭怖いを信じてしまった江戸の住人の姿を思い起こしたいと思います。

　繰り返しますが、私たちが取り交わす言葉によって恐れというのは、深まっていきます。そこに言葉の不思議さがあります。言葉というものが神とともにあるという事の一端がそこには現れているでしょう。私たちが怖いね怖いねと言い合っているうちに、いつの間にか、その恐るべきものは、大波のような具体的な姿を、私たちのすぐそばに顕すことになるでしょう。

　私たちにとって、主イエスを恐れることが一番よいことであります。そのことは今日のヨブ記を読めば、より分かって来るでしょう。とはいえそのヨブにしたって、そのことが分かるまでに、七転八倒し、のたうち回ったわけですから、そんなにすぐに悟れる、といったことでもないのかも知れません。

聖書では海という場所は、私たち人間が制御することができない、思い通りにならない怖い場所として思われていました。私たちはえてして、この地上での生涯を終えて入れられる場所も海のように怖い場所なのではないかと思って、あの世も海も同様に怖い場所だ、という思いが大きくなっていくかも知れません。事実弟子たちもそのような思いに駆られて、大波の海を恐れたのかも知れません。

しかし、そこに、その荒ぶる海も、この地上も同じように支配してくださる方がいれば、私たちはとても心強く安心です。創世記の始めから、主なる神は「天の下したの水は一つ所に集まれ。乾いた所が現れよ。」と言って、陸と海とを分けられ、陸と海とを作られました。それと同様に、全てを作られた主なる神は、この世もあの世も区分して、思い通りに作られたのであります。私たちは、今、神様が作られた被造物のうちのほんの一部分を垣間見せられているだけかもしれません。私たちには今、見ることが出来ないでいることのほうがはるかに多いでしょう。ヨブ記の言葉を借りれば、「海の湧き出るところも／深淵の底のことも、又死の闇の門」のことも私たちは知らないのです。

しかし、現代の科学者たちはいうかも知れません。私は、海の底の隅々まで行巡ってその正体を明らかにしよう、死の闇の門の先にある世界を明らかにしようと。そういった方々の意気込みと努力を一概に否定することは出来ませんが、私たちは、同時に、主なる神の恐るべき御業のことを忘れてはならないでしょう。ヨブ記で、主なる神は言います。

「しかし、わたしはそれに限界を定め／二つの扉にかんぬきを付け「ここまでは来てもよいが越えてはならない。高ぶる波をここでとどめよ」と命じた。」

このようにして主なる神は波に命じて、海と陸を区分しましたが、この命令は私たち人間に対することでもあるでしょう。人間の思いあがった心が、神の定めた限界を超え、留まることなく、行ってはならない領域にまで踏み込んでしまった時、私たちが身を置くこの世は、実に恐ろしい世の中になってしまうのではないでしょうか。

あの世のことは、一足先に行かれた人でしか分かりません。私たちは、霊的な交わりの時を持ち、今は天に召されたその方々と交流しながら、互いに神の国への道行を語り合うのが一番よいことでしょう。ここにも語り合いがあります。私たちはそのように、語り合いを深めていくことによって、全てを支配されている恐るべき主イエスのご支配に、全てを委ねることが出来るようになることでしょう。「いったい、この方はどなたなのだろう。風や湖さえも従うではないか」と語り合った弟子たちの言葉を思い起こしながら、私たちも恐るべき主イエスをほめたたえつつ、この一週間の道行を歩んでまいりましょう。

お祈りいたします

天の

私たちはあなたからいただく日々の恵みとご配慮に感謝しみ名を賛美いたします。またあなたの計り知れない計画におそれつつ、み前にひざまずくものです。主よどうか私たちの罪深い行いを許し、み栄を顕してください。平穏に過行く日々さえもおびえてしまう私たちの寄る辺ない心を、あなたの導きによって驚くべき喜びで満たしてください。

　私たちは、自分の目では見ることが出来ない世界中の出来事に無関心ではいられません。どうか今ミャンマー等で起こっている争いによって多くの方々が命を失い傷ついていることを覚え、あなたの憐れみと救いを待ち望ませてください。多くの方々の苦難と苦悩に私たちが寄り添っていくことが出来ますように。

あなたは陸と海とを分けられたように、ここに十字架をおいて、天と地との境界線を定められました。どうか私たちを、この地上にあっての命のあとに、あなたの定められた神の国への命へと導いてくださいますように。

父と聖霊と共に